



TITLE:

戮力同心协作，严谨求实治学

AUTHOR(S):

柳, 建坤

CITATION:

柳, 建坤. 戮力同心协作，严谨求实治学. 2015年度京都大学南京大学社会学人類学若手ワークショップ 東アジア若手人文社会科学研究者ワークショップ報告論文集 2016: 216-218

ISSUE DATE:

2016-06-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/215765>

RIGHT:

戮力同心协作，严谨求实治学

柳 建坤 (LIU Jiankun) *

东亚诸国家尽管在地理、气候、资源状况方面千差万别，但在儒家文化圈的影响下有着较为一致的价值取向和文化心理，特别是在学术交流方面的合作广泛并且源远流长。近代以降，在“民族主义”以及各种政治因素的影响下，却使有着良好合作基础的东亚文化交流遭遇断层的危机。“想象的共同体”在促进国民意识形态趋同和深化国家动员能力的同时，也有意或无意地制造了无形的政治和学术“边界”，进而带来了学术体制僵化、思想观念沉滞以及国民戒备心理加强等诸多恶果。因此，能否突破这种阻隔于东亚各民族之间的心理屏障就成为21世纪中国大陆、台湾以及日本的学术体系增强自身生命力和活力的关键之一。京都大学、南京大学和台湾大学以及其它参会大学是各自国家和地区的顶尖大学之一，尤其都以学风自由、治学严谨而著称。令人欣慰的是，它们并未局限于本国学术体制内潜心研究，而把目光放在了促进东亚学术交流和振兴儒家文化圈这一路途艰险但又光辉无比的远大事业上。尽管要破除这种存在于心理与文化上的阻隔非一朝一夕之功，其艰难甚于跨越国家之间明确的地理界限，但长期持续地通过青年学者们在研究领域和视角的切磋琢磨以及学术思想的激烈碰撞，学术之花终有时日会不经意地孕育出有益果实。

另一个存在于学术界与政界和民间的“边界”也值得令人深思。如何保持其成长的独立性与持续性之间的平衡是目前在物质资源上极度依赖于政府财政的大学研究所面临的最大难题，同时如何将浮在云端的“科学”与民间社会建立联系又使问题更加复杂化。创造自由、平等、博爱的“乌托邦”是社会科学研究的目标和使命，“浮在云端”的实质乃是学界因保持既得利益而有意在民众与学者之间制造界限，但最终也会因失去其支持和理解而成为“无源之水”。显然，克服这一边界需要学术界主动将深奥晦涩的研究成果转化为服务于民众的“智慧果实”，在创造健康向上的社会同时实现自身价值的提升和生命力的延续。而解决学界官僚化的问题既需要大学负责人的道德良心，也需要通过与企业、社会之间的合作创造另一条生存途径，这对于减轻政府的行政控制和意识形态统治是一种理性选择。实际上，三方之间的关系并不是孤立分散，每一方的存在和发展都需要对方的资源支持，振兴大学研究也是如此。

中国明朝的大哲学家王守仁终生倡导“知行合一”，但多数的学术交流都只是思想和技法的比拼，而无社会实践的支持与证明，学问最终成为了徒费之功。而且学术研究的使命是为社会造福，那么道德感与使命感就应该成为每一位学者的治学之本。本次蓝天财团之行在让我辈感受社会民生之于学术研究之重要的同时，更加明确了社会科学的发展指向和学科使命。在工业化时代，普通人在环境公害中所受到的身心创伤以及维权的艰难使每一位在场的青年学者不仅动容和悲叹，但同时也激发了向社会不公和特权挑战的激情和勇气。回顾本次论坛中的报告文集，无论是移民研究、农村土地产权问题，还是东亚城镇化进程和“万人坑”纪念馆，每一篇的内容都指向了东亚各国民众中的最普通生活，但隐含于文字背后的社会关怀却无比珍贵，这在让学者们品尝生活艰辛的同时，又为其表现的责任和道德深感敬佩。

本次论坛无疑彰显了每一位优秀学者所必备的素质：学识与道德兼备、研究与实践同行。但学问之路永无止境，“边界”问题仍将像枷锁一样困扰着学者们的研究视野的宽度和广度，而一旦意识这一问题也就意味着学者们面临一次重生的机遇。期待在未来能够有更多的东亚国家的优秀大学以及学者参与到学术讨论中，以严谨求实的治学态度和精诚合作的精神为东

亚社会科学的研究贡献力量，促进各国民众心理和文化层面的理解和包容，最终推动东亚地区的和平与繁荣。

一致協力、謹厳学究

柳 建坤 (LIU Jiankun) *

東アジア諸国家は、地理や気候、資源の状況だけ見ると千差万別であるが、儒教文化圏の影響の下で、比較的に価値観や文化、心理面では一致しているところがあり、とくに学術交流においては、広く長い協力関係がある。近代以降、「民族主義」および各種の政治的要因の影響の下、良好な協力の土台を有していた東アジア文化交流は断裂の危機に瀕した。「想像の共同体」は国民意識形態の形成の促進や国家動員力の深化と同時に、意識的にあるいは無意識のうちに、政治と学術の形のない境界を生み出し、さらに学術制度の硬化や思想観念の沈滞そして国民の警戒心の強化などの負の産物をもたらした。このために、このような東アジア各民族の間の心理的障壁による隔絶を突破できるかどうかは、21世紀の中国大陆、台湾および日本の学術体系が自身の生命力と活力を増強させるための鍵の一つなのである。京都大学、南京大学、台湾大学そしてその他の参加大学はいずれも、各国家と地域を代表する大学のひとつであり、とりわけ自由な学風、厳格な研究で著名である。喜ばしいのは、これら大学は国内の学術体制の中にとどまらず、東アジアの学術交流と儒教文化圏の振興という危険で困難ではあるが比べるものがないほどに輝かしい大事業に視線を向けていることである。このような心理や文化に存在する隔絶を取り除くだけでも一朝一夕になし得ることではなく、国家を跨る明確な地理的境界より艱難であるが、長期的に持続する若手研究者たちの研究領域と視点の切磋琢磨や学術思想の活発な邂逅を通じて、学術の終焉はいつか思いがけず有益な果実を育むだろう。

それから、学術界、政治、民間の間に存在する「境界」もまた一考に値するものである。いかにその成長する独立性と持続性の間の均衡を保持するかは、現在において物質資源上極度に政府の財源に依存している大学の研究機関が直面している最大の難題であると同時に、雲の中に浮かぶ「科学」と民間社会の間にいかに連携関係を築き得るかもまた問題をさらに問題を複雑化させる。自由、平等、博愛の「ユートピア」の創造は、社会科学研究の究極的目標と使命であり、「雲の中に浮かぶ」本質はまさに学界が既得権益を保持するために意識的に民衆と学者の間に境界を生み出すことであるが、最終的にはその支持と理解を失うために「源のない水」となり得る。明らかに、この境界を克服することは、学術界が主体的に難解晦渋な研究成果を民衆に奉仕するための「智恵の果実」に転化することように、健全に発展する社会を創造すると同時に、自身の価値の向上と生命力の持続を実現することを必要とする。学界の官僚化の問題の解決には、大学の責任者の道徳や良心も必要であり、また企業や社会との間の協力を通じて他の生存戦略を創り出すことも必要である。これは政府の行政的統制とイデオロギー的統制を抑制に対するひとつの合理的な選択である。実際に、三者の関係は孤立分散したものではなく、一方の存在と発展は一方の資源と支持を必要とし、大学における研究の振興もこの例に漏れない。

中国の明朝の大哲学者・王守仁（王陽明）は終生「知行合一」を説き続けたが、学術交流の多くはただの思想と技法の競争であり、社会的実践の支持と証明がなければ、学問は最終的には徒労に終わるだろう。なおかつ、学術研究の使命は社会の福利向上であり、道德観と使命感は学者ひとりひとりの学究の根本となるべきである。今回のあおぞら財団の見学は学術研究における社会生活の重要性を感じさせてくれたとともに、さらには社会科学の発展の方向性と科学の使命を明らかにしてくれた。工業化の段階において、一般の人々が公害によって受けた心身の損害や権利行使の困難はその場の若手研究者を動揺させ悲嘆させただけでなく、同時に社会的不公平と特権に向けて抗う情熱と勇気を生み出した。ワークショップの報告を思い返すと、移民研究、農村土地問題はもちろん、東アジアの都市化過程や「万人坑」記念館もいずれの内容も東アジア各国民衆の最も普通の生活に目を向けたものだが、その背後に隠れた社会的配慮はこの上なく貴重なものであり、学者たちが生活の中の辛苦を吟味させると同時に、それが表わす責任と道德には深く敬服する。

今回のワークショップは疑いもなくひとりひとりの優秀な学者が備えているべき素質、つまりは学識と道德を兼ね備え、研究と実践を両立することを明らかにした。しかし、学問の道は止め処のないものであり、「境界」問題はなお枷と鎖の如く学者たちの研究の視野の幅と広さに当惑しているが、ひとたびこの問題を意識することは学者たちが生まれ変わる機会に直面していると意味している。将来においてより多くの東アジア国家の優秀な大学と学者が学術議論に参加し、謹厳な学究的態度と誠実な協力の精神をもって東アジア社会科学の研究の貢献力となし、各国民衆の心理と文化の面の理解と寛容を促進し、最終的には東アジア地域の平和と繁栄を推進することを期待する。

（翻訳 中山大将、巫靚）